

[年始の挨拶の意味]

本稿執筆現在、正月休みが明けてからわずか数日しか経過していないためか、年始の挨拶「あけましておめでとうございます。」を頻繁に耳にします。簡単に調べてみると、この挨拶は我々が生きて新年を迎えることができたこと、あるいはこれから始まる新たな一年を生き抜くための力を神様から与えてもらえることへの祝辞であるようです^{注1)}。自力にせよ他力にせよ、生きていることへの確信と感謝が「あけましておめでとうございます。」によって暗示されているのです。

[問題提起と本ブログ記事の目的]

さて、我々は本当にこの挨拶をするのにふさわしいのでしょうか。つまり、我々は生きて年を越せたと確信をもっていいのでしょうか。普通に考えれば、答えは「はい。」以外にあり得ません。しかし、それは“生きる”を辞書的な定義、すなわち、生命を有し活動できる状態として捉えていることが前提となっています。ここで僕が考えたいのは、その“生きる”の定義は本当に十分か、ということです。“生きる”が持つ辞書的な定義を大前提として理解したうえで、より具体的な定義を構築する端緒をつかむことが本ブログ記事の目的です。

[“生きる”を再定義すべき理由]

日本人の平均寿命は年々延びており、人生 100 年時代とすら言われるようになりました。また、心身ともに健康な人であれば、最低でも 70 歳までは生きるだろうと潜在的に思っているはずで^{注2)}。つまり、高度に発展し管理され、十二分にモノで充たされた社会で生活を営む我々は、身体的死に対する危機感や恐怖を昔ほど強く持ち合わせてはいないのです。したがって、身体的生の持続が当たり前となった現代において、“生きる”をただ単に体が機能する状態とする原初的な定義に留めておかなければならない理由は存在しないと言えます。

むしろ、漠然とした生への定義は対極にある死への定義をも曖昧にし、我々の生活を脅かしているといっても過言ではありません。つまり、人生の終着点である死が生命を失い活動できない状態であると定義されてしまうがために、我々は、特に若者は、体の動く限り続き、暗く、途方もなく長い旅路の途中に自分自身がいるかのように錯覚してしまいます。その結果、“生きる”それ自体に違和感や嫌悪感を覚えずにはいられなくなるのです。苦痛を抱えた状態で時間を浪費することに意味はあるのか。しんどさが長く続くのならばいつそのこと逃げ出してしまった方がいいのではないのか。そのような自問自答の末に、最終的に人は自ら“生きる”を手放すのでしょうか。

では、基本的生活すら脅かされていた不安定な時代に後戻りすればいいのでしょうか。COVID-19 およびその変異株が蔓延している今日においては、自制などやめてしまえばいとも簡単にそのような危機的な状況を実現することができるはずです。当然、そのように無謀なことはしないでしょう。我々の本能は常に“生き

る”を望んでいるからです。そうであるにも拘わらず、“生きる”が担保された環境では本能は影を潜め、ふとしたはずみで死を選びたくなるのです^{注3)}。

この実社会において体感する生への意識と、元来人間が併せ持つ本能的な“生きる”への渴望との矛盾点に、“生きる”の辞書的定義の不十分さが表出していると考えています。従来の“生きる”が現代社会では通用しないことが浮き彫りになった今、“生きる”を再定義することは必要不可欠なのです。

【“生きる”の再定義】

健康な人間にとって、“生きる”を身体的生死で判断する姿勢は現代社会において破綻していることを既に述べました。それでは、我々は何を根拠に自分自身の生死を自覚すればいいのでしょうか。それは偏に、身体的実存と精神的実存との一致です。そして、生は身体的実存と精神的実存とが一致している状態であると定義できます。つまり、自分自身の見かけの活動と理想とする自分像との相似性を生死の基準とすればいいのです。両者の均衡が保たれているときに生きているときであり、均衡が崩れたその瞬間が死なのです。

【新たな定義を足掛かりにして】

飽和状態にある現代社会に生を受けた我々にとって、“生きる”を自分自身の身体の在り方と精神の在り方との調和と再定義することは、生きる上での唯一の救済措置に他なりません。もしあなたが生死の身体性だけに固執し、ひどく悩んだ末に“生きる”を諦めた場合、あなた自身が再起の機会を損失するだけでなく、“生きる”を選択し続けた我々に対して深い悲しみと後悔の念を否応なしに押し付けることになります。その一方で、新たな生の定義に基づけば、身体的実存と精神的実存との不一致に気付いた時点が死を意味します。あなたは、その時点で、死にたいという願望を叶えるだけでなく、誰にも迷惑をかけることなく、最初からやり直すことができるでしょう。

そもそも、身体的実存と精神的実存は何によって決定されるのでしょうか。その決定因子には自我と他我が関係していると考えています。社会性を持つ我々は、一般に、自分自身の経験に基づいて他者の思想を想像し、他者にとって必要と思われる行動をする傾向があります。しかしながら、その行動原理に対して違和感を覚えることはないとしても、自分自身の意思と行動とが乖離してしまうことは少なくありません。我々は日常生活の中で、意識的にせよ無意識的にせよ、社会に対する強い意識や責任感、他者からの承認欲求、あるいはお金などを媒体として両者をつなぎとめています。ここでは詳しい言及は避けますが、我々はその姿勢が本当に正しいのかを問わなければなりません。それら媒体を追い求めるよりも先に、自我を見つめなおし他我を正しく評価する技術を体得し、生を実現する鍛錬を続ける姿勢こそ、人間のあるべき姿ではないでしょうか。

【まとめ】

明けておめでとうという挨拶には、生きることへの確信と感謝が内包されています。しかし、我々は本当に生きているのでしょうか。毎日、何とかストレスを誤魔化しながら耐え抜き生きている状態は、もはや身体的には生きているとしても精神的には死んでおり、そのような状態は生きているとは言えないのではないでしょうか。そのような問題提起の下、“生きる”を身体的実存と精神的実存の一致である、と再定義しました。その結果、両者の均衡が崩れている状態は死んでいる状態を意味し、多くの人は自分自身が既に死んでいたという事実を自覚することでしょう。死の自覚をもってして、我々は、飽和した社会の中で形骸化した人生に、自我を見つめなおし他我を正しく評価する姿勢を、そして身体的実存と精神的実存との直接的な調和を試みる姿勢を取り戻すことができるのです。今年こそは生きて新年を迎えたいものです。

[注釈]

注 1) このことについて簡単に調べていたとき、次の文章を含むコラムを見つけた。『では、なぜ正月はおめでたいのか？ それは、「年取り」の祝いだったからである。かつては誕生日ではなく、正月が来るたびに皆が一斉に年を取る「数え年」だった。人々に新しい年齢と、一年を生き抜く生命力や幸運を与えてくれる神様である年神様がやってくるのが正月であり、古くから、われわれ日本人には年神様を盛大に招くための行事があり、それらは変遷をたどりながら今に伝承されているのだ。』（國學院大學メディア 新年を迎える日本人の心を知る より）

注 2) 2014 年厚生労働省委託調査において、何歳まで生きられると思うかに対する回答の平均値は男性が 77.75 歳、女性が 77.52 歳だった。（平成 26 年版厚生労働白書 第 1 部 健康長寿社会の実現に向けて～健康・予防元年～ 第 2 章 健康をめぐる状況と意識 第 4 節 死生観 より）

注 3) 令和 2 年度の自殺者死亡率は令和元年度のそれと比較して、10 歳代および 20 歳代において大きく上昇していた。（警視庁 令和 2 年中における自殺の状況 より）

以上